

# NPO等による外国人児童生徒に 対する就学促進事例について — 高校進学支援を中心に —

学校における外国人児童生徒  
等に対する教育支援に関する  
有識者会議 第4回

2016年3月7日 山野上麻衣

# はじめに

- 外国につながる子どものたどる道筋の多様性について

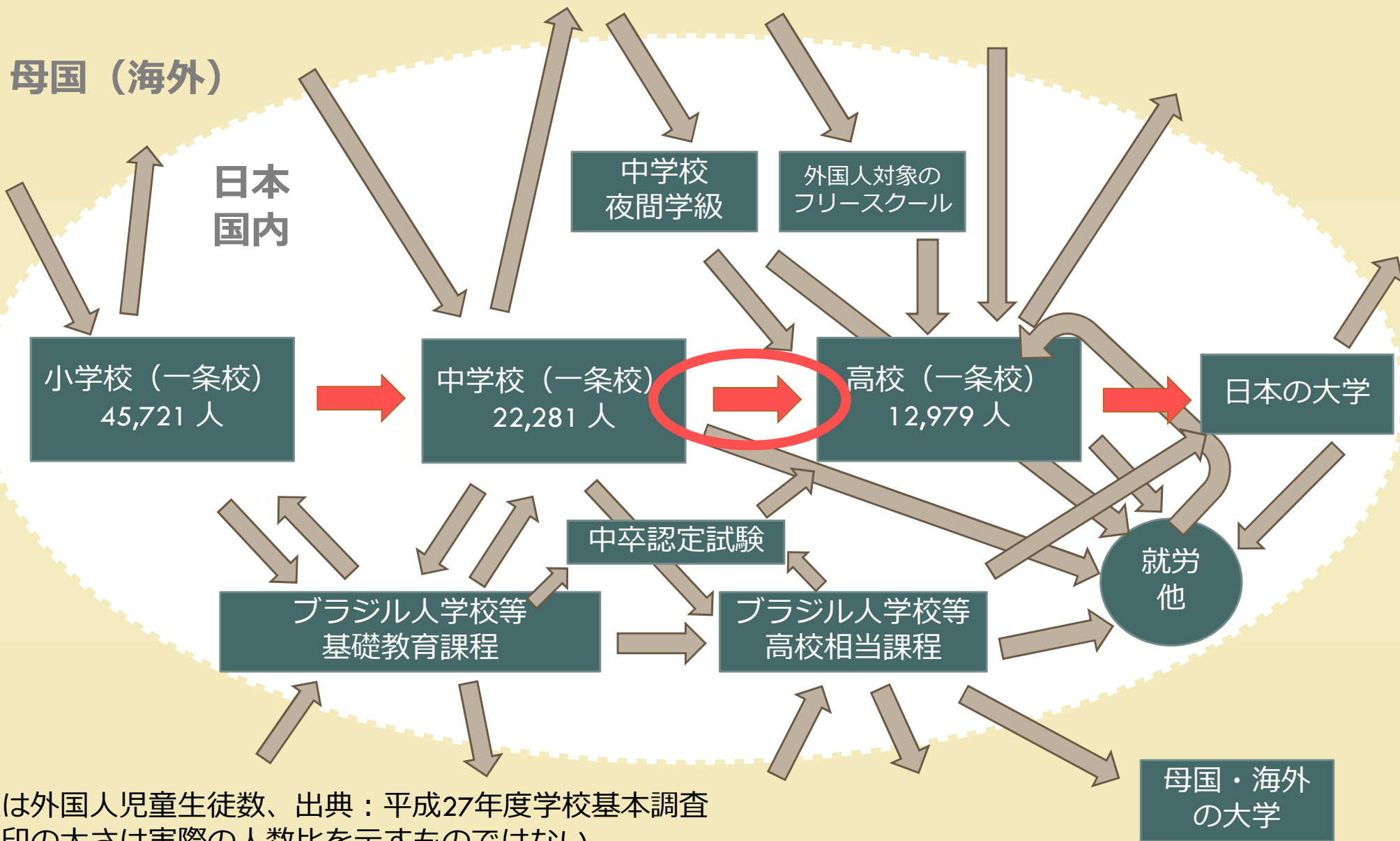
- ・外国につながる子どものたどる道筋は、「日本人の両親の間に生まれ、日本で育ち続ける子ども」よりも多様

- ・高校進学を含む進路について検討する際には、「中学校（一条校）」から「高校（一条校）」への切れ目のない接続だけを見ていると、見落とす子どもが多く存在する（そしてそのような子どもたちこそ困難を抱えがちであり、制度的枠組みの外でNPO等が懸命に支えてきた）

- ・学校における教育支援を検討するという会議の性質上、ここでは「中学校（一条校）」から「高校（一条校）」への進学に限定して扱う。

母国（海外）

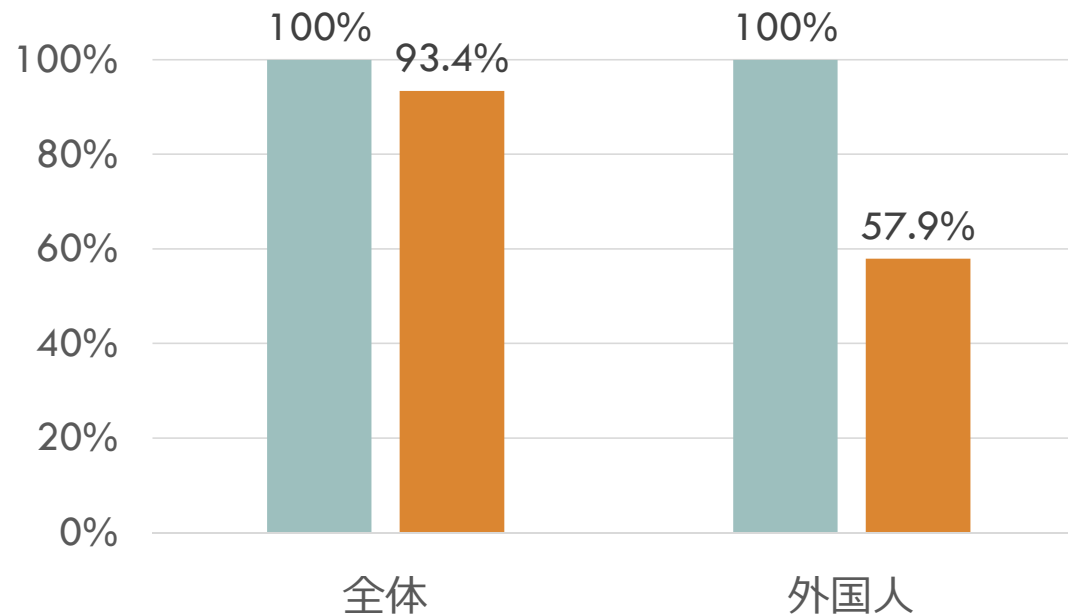
日本国内



数値は外国人児童生徒数、出典：平成27年度学校基本調査  
 ※矢印の太さは実際的人数比を示すものではない

# (1) 高校在籍状況

3年前の中学校在籍者数に対する高校在籍者数比率



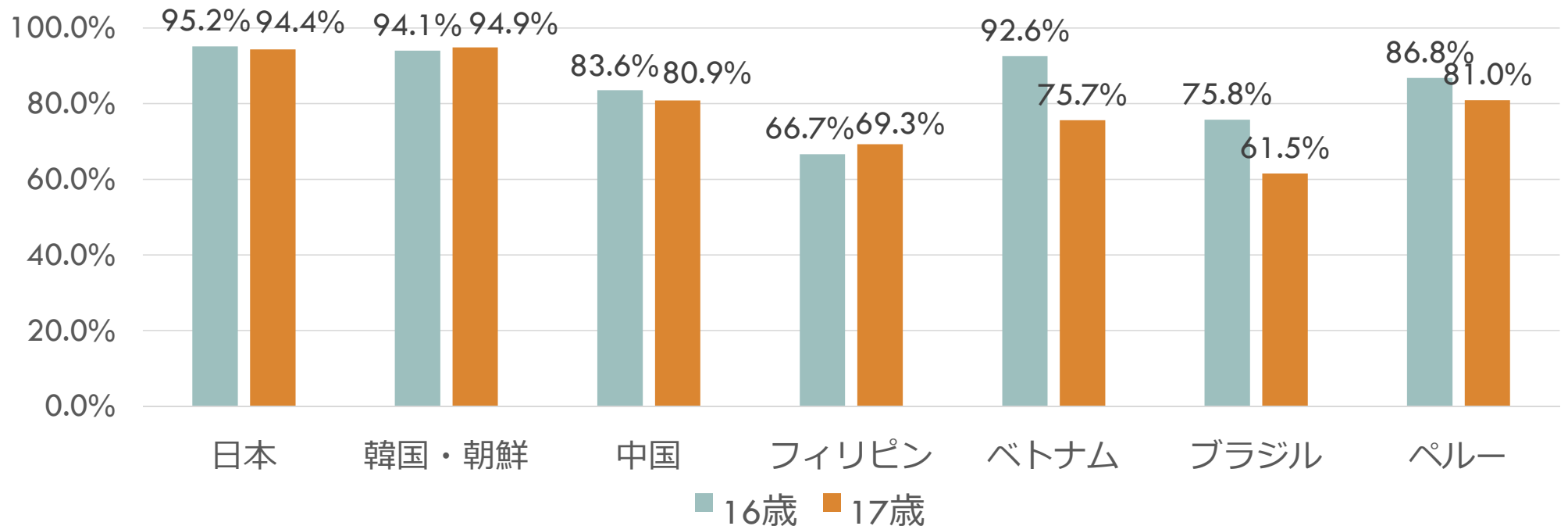
■ H24(2012)年度の中学校在籍者数

■ H27(2015)年度の高校在籍者数

出典：学校基本調査

## (2) 国籍別の高校在学率

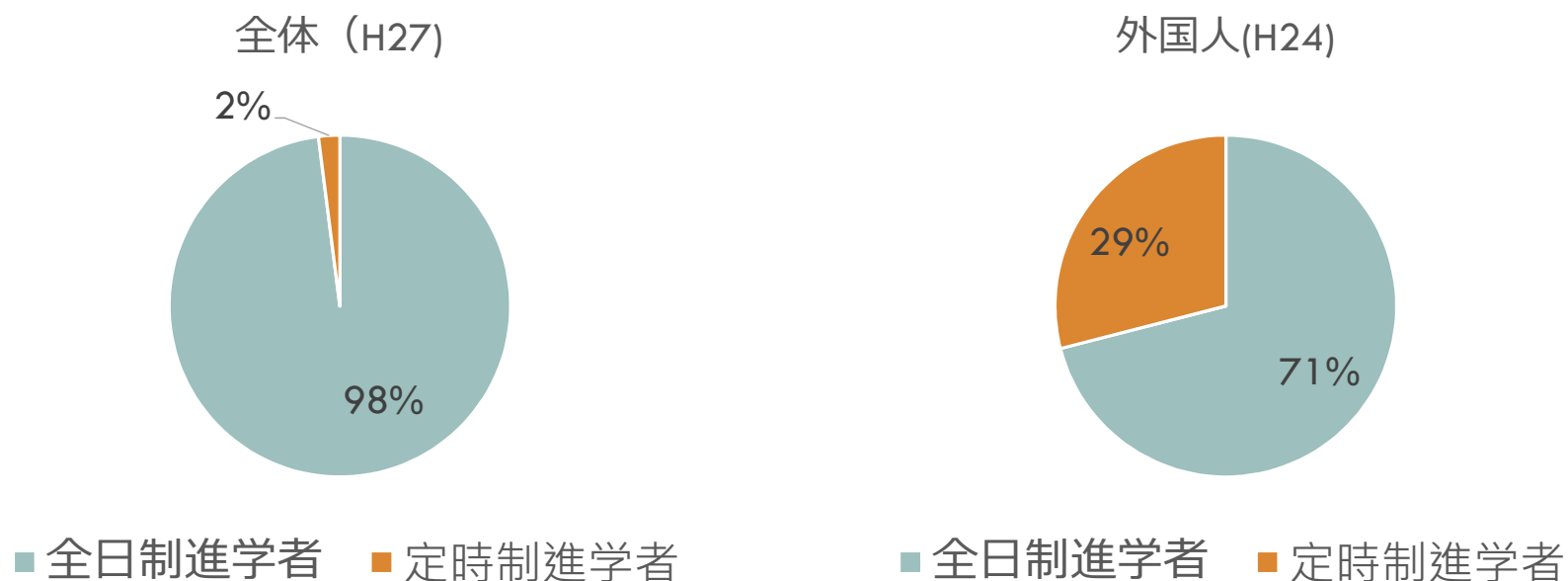
### 国籍別高校在学者率



出典：2010年国勢調査オーダーマード集計（高谷幸他2015「2010年国勢調査にみる外国人の教育—外国人青少年の家庭背景・進学・結婚—」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第39号

# (3) 全日制：定時制進学者比率

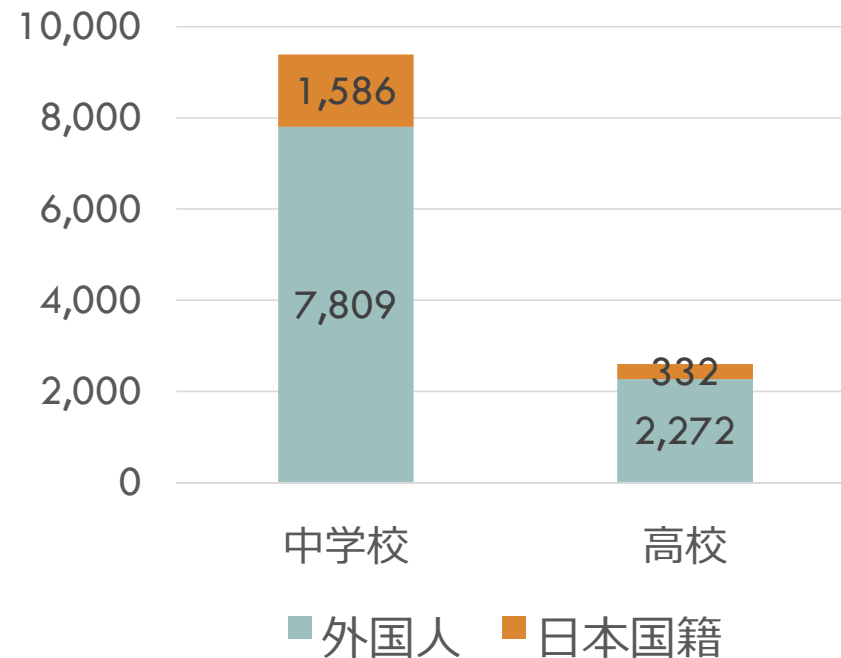
高校進学者に占める全日制・定時制比率



出典：「全体」H27年度学校基本調査、「外国人」外国人集住都市会議2012資料

## (4) 日本語指導が必要な生徒

日本語指導が必要な生徒 学校種別在籍者数



出典：文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成26年度)」

## (5) データから読み取れること

- ・外国人の子どもは日本人の子どもよりも高校に進学しにくい
- ・進学後、在籍し続けるのも日本人の子どもより難しい
- ・進学・在籍の状況は、出身国によって異なる

※なお、以下の点に留意が必要

- ・中学校在籍者数をベースとした進学率・在籍率には、中学校に在籍していない子ども（学齢超過で来日する子ども、外国人学校在籍者、不就学者等）が母数に含まれないため、実際の進学率・在籍率はさらに低いと考えられる
- ・日本国籍を有する子どものデータは少なく「日本語指導を必要とする日本国籍の生徒数」で類推するしかないが、外国人の子ども同様の困難を抱える子どももいると考えられる



## (6) なぜ差がついてしまうのか

- ・言語の差異・母国のカリキュラムとの差異
- ・母国での学校教育の状況、就学歴・学習歴の多様性
- ・子ども／学校／保護者の三者それぞれのコミュニケーションの難しさ

→日本語がわからず友人が作れない、授業についていけない

→学習への動機づけの低下、居場所のなさ

- ・生活の不安定さから派生する見通しの立たなさ（帰国？就労？）
- ・家庭から得られる資源の差

⇒ **高校入試という壁を乗り越えることが難しい**（受験自体をあきらめることも）

## (7) 学校とNPO等との連携

学校：

- ・ある年齢の子どもに決まった内容を身につけさせることを目指す
- ・一定年齢に達したら卒業し、新入生が入ってくる
- ・原則として学区の子どもが対象

NPO等：

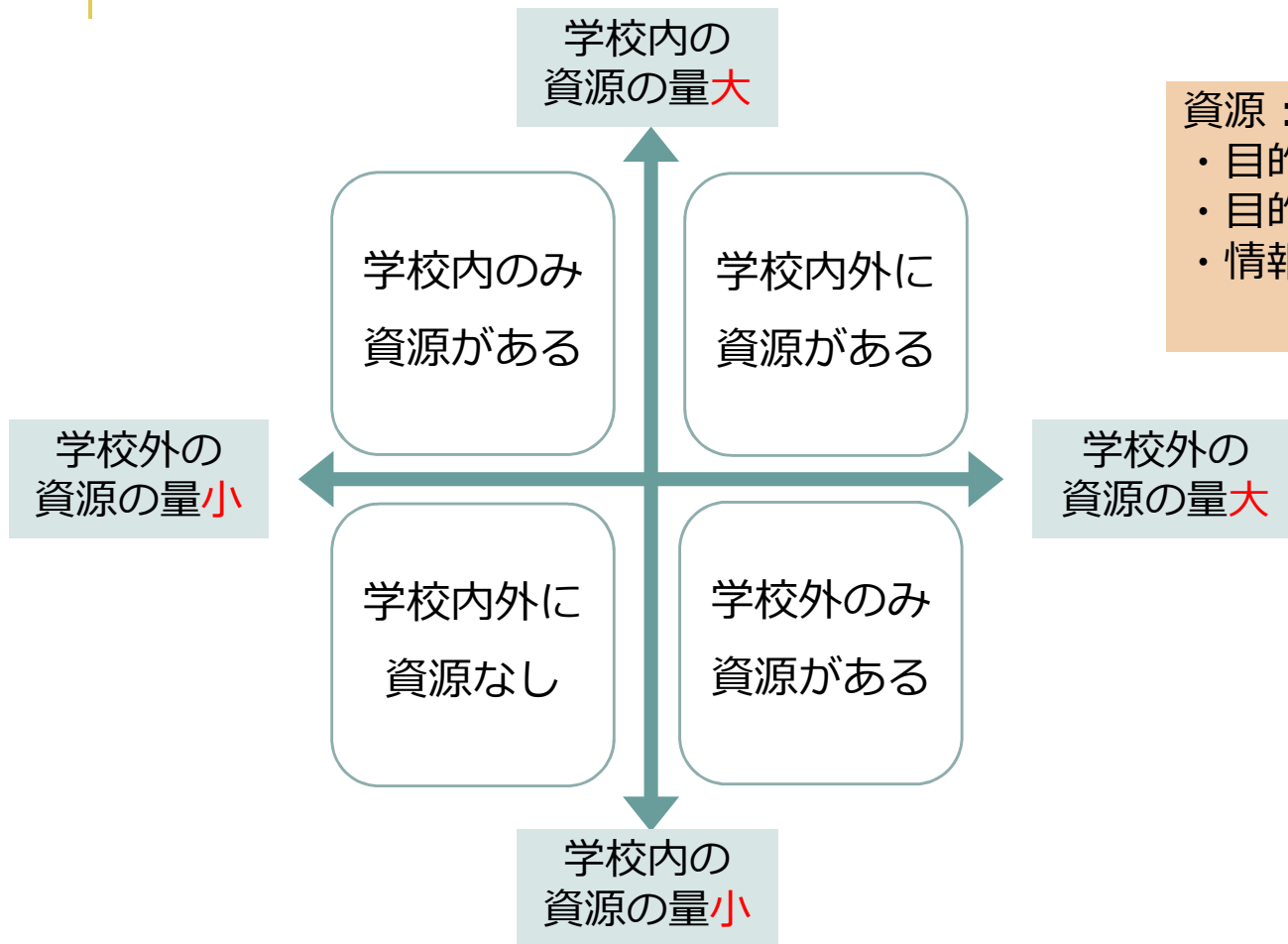
- ・組織のミッションに適合すれば何をやってもよい（機動的に動ける）
- ・年齢にかかわらず、地域で長く子どもたちとつきあい続けられる
- ・学区や行政区域に縛られない

⇒学校では対応できないことでも、NPO等なら対応できるかも

## (8) NPO等の果たしてきた役割

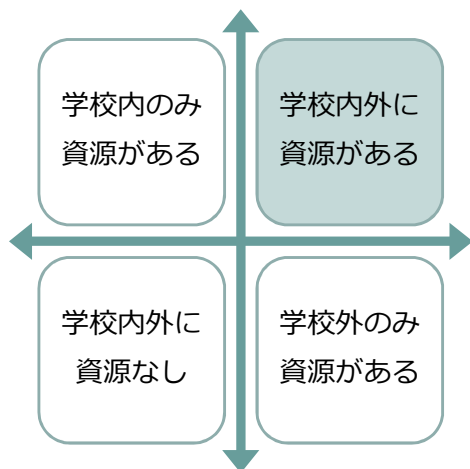
- ・ 学習支援／日本語指導（学力・成績を上げる）
  - ・ 居場所づくり／仲間づくり（気持ちを支える）
  - ・ 進路選択支援／多言語による情報提供
  - ・ ロールモデルの提示
  - ・ 子ども／学校／保護者をつなぐ（言語的・心理的距離をうめる）
  - ・ アドボカシー（支援の必要性の提示、入試特別枠の設置・拡充運動等）
- }（見通しを立てる）

# (9) 連携のあり方のパターン



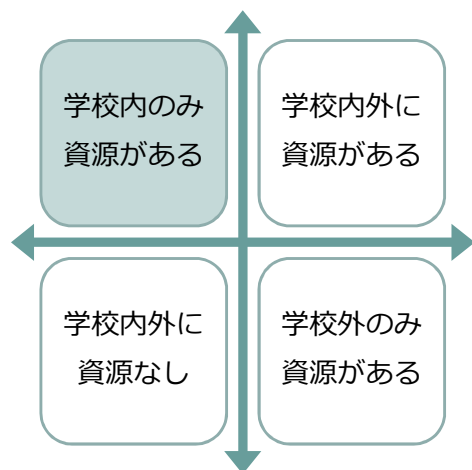
資源：  
・ 目的のために動ける人や組織  
・ 目的を達成するための情報、知識やスキル  
・ 情報を得られるネットワーク

# 学校内外に資源がある場合



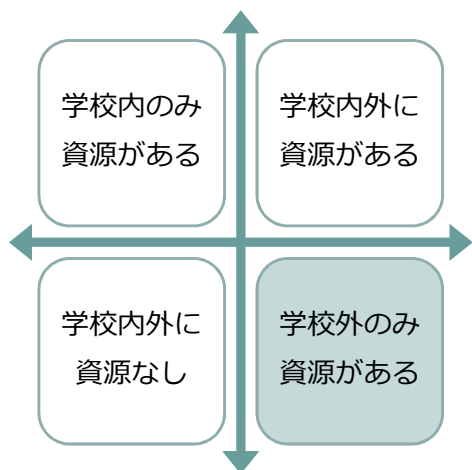
- ・ 外国人が集住する学区
- ・ 連携がうまくいけば相乗的な効果が期待されるが、丸抱え／丸投げのリスクがないわけではない
- ・ **連携のための調整が最大の課題**
- ・ 前提のちがい（ものごとを見る角度の差、置かれた条件の差）を互いに理解して尊重できるかどうかは鍵
- ・ 各論（指導方法、個別具体的な進路の話）から入ると対立が生まれる場合がある。遠くの目標をともに思い描けるとよい

# 学校内のみに資源がある場合



- ・学校だけでもそれなりに何とかなっている場合（それでも学校だけでは対応できないニーズが目に見えている場合）
- ・ニーズに応じた**資源の創出が最大の課題**
- ・子どもや保護者の目線に立ちながら、学校外で何が必要かを発信していけば何かが始まるかも
- ・学校教員が学校の外で（学校とは異なる役割を果たす場としての）資源を作り出す事例もある

# 学校外<sup>外</sup>のみに資源がある場合



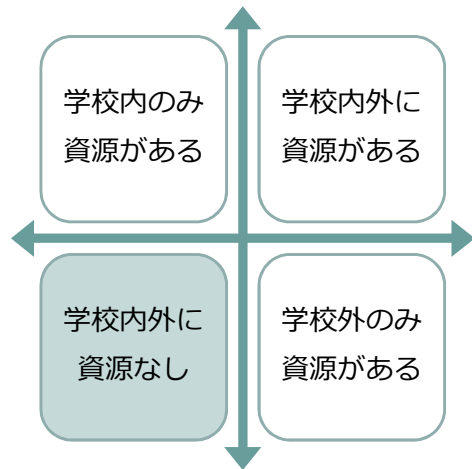
- ・外国人が多い自治体だが学区には外国につながる子どもが少ない学校や、外国人がそれなりに多いが規模が小さめの自治体が集まっている地域

- ・学校はNPO等を頼りにし、外国人の子どもについては丸投げが起こりがち（外国人が入りやすい高校の情報などもNPO側が多くもっている場合がある）

- ・ **学校内の資源（余力や関連情報）がない中で、学校の関わりをどう生み出せるかが最大の課題**

- ・ 大変でも学校外の資源と連携することで、校内の情報共有につながる場合もある

# どこにも資源がない場合



- ・ 広域で見ても外国人が少ない散在地域
- ・ **ニーズに気づくことができるか、または、「外国人の子は仕方ない」とあきらめずに最初の一步を踏み出せるかどうか**が課題
- ・ まずは他地域の資源をうまく借用することから（IT化の恩恵なども上手に活用できるとよい）
- ・ 子どもたちも保護者も先生方も孤立させないために、このような地域に向けた発信も必要



# まとめ

- ・ほとんどの子どもが高校に進学し卒業する社会の中で、外国人の子どもの高校進学・卒業が難しいという現状がある（日本国籍をもつ外国につながる子どもの中にも同様の困難があるのではないかと推測される）
- ・具体的な支援にあたって利用できる学校内外の資源には地域差がある
- ・しかし、その地域差が子どもたちの取りうる進路の差（制約）となって現れてはならない
- ・財政支援含めて広域行政の課題でもあるが、市民社会の課題としても考えたい ⇒地域の現実から出発しながらも、諸資源をうまく活用しながら子どもたちの進路をどう保障していけるかを考えたい
- ・目指すのは、子どもたちの最善の利益